「授業力」は生徒を救う

── 教科指導力を高めるための実践とシステム（概要）──

増 井 洋 介（尚絅高等学校教諭）

第１章　「授業力」に目を向けた理由

私が今回の研究で取り上げたかったことは、次の３つである。
① 高校入学者の多くがどの教科につまずきを覚え、どんな授業を求めているか。
② 授業力のある教師がいかにそれを身につけ、更にそれを向上させようとしているか。
③ 先進校が授業力の向上にいかに取り組んでいるか。

この研究動機を持ったベースには、自分自身の劣等生経験と、教師になってからの経験がある。

決定的に授業力を意識するようになったのは、2001年、県内の公民科研究会で村上浩一先生（熊本市立一新小学校教諭　教材授業開発研究所熊本支部代表 http://www5f.biglobe.ne.jp/~kyouzai/）の講演を聞いてからである。以降、いかに授業を立体化し、生徒達に分からせるかを自分のテーマに据えて授業に取り組むようになった。理想の域にはまだまだ遠いが、自分が考える「良い授業」作りのために悪戦苦闘している。私の考える「良い授業」とは、「①生徒の興味を喚起し」、「②生徒に内容を理解させることができ」、さらに「③内容に深みのある」授業である。

「授業力」が「生徒を救う」と確信したのは、勤務校の生徒指導室に常駐し、数学・英語の授業が分からなくなってしまった生徒に、これらの教科をマンツーマンで教えた経験からである。彼女達（勤務校は女子校）の教科学力が厳しい水準にあることを知り、この問題を解決することなく、生活態度の改善は図れないのではないかとの結論に達した。

大げさな話だが、今日、全国の高校を一年間に中途退学する10万人を超える生徒達の何割かは、「分かる授業」によって救うことが出来るのかもしれない。いや、全国の多くの学校、特に教育困難校で、生徒達がすでに学校に「学びに来ているのではない」からこそ、「分かる授業」によって生徒を学校につなぎ止める必要性が高い、とも言える。

しかしどうだろう、お読みの先生方の学校で「授業のあり方」や「授業力」は多くの先生方の話題にのぼっているだろうか。勤務校では、それはごく一部の話題に止まっている。残念ながら。

加えていえば、学校がどんなに立派な教科指導研修のシステムを持とうと、授業の善し悪しは教師個々の生徒に向き合う姿勢にかかっていると思う。まず大切なことは「生徒のせいにしない」ことではないか。「授業力」に意識を向けるようになったここ数年、自戒を込めつつ、強くそう思う。

第２章　苦手科目と授業に関するアンケート

６月下旬に、県内の私立高校５校（うち女子校２校）の１年生170名を対象にアンケート調査を行った。目的は、中学時代の苦手教科、苦手になった理由、求める授業像の把握である。

データ処理の時間的制約から母集団の小さなアンケートになったが、対象は進学実績や入試難度に偏りがないように選んだ。実際、苦手教科に対する理解度（自己評価）を10パーセント刻みで答えてもらったところ、５校の平均値は約40～60%の間で程良いばらつきが見られた。

１．中学時代の苦手教科

まず、中学時代の苦手教科については、数学と回答した生徒が最も多く、実に40%を超えた（**図１**）。要因として、「算数」と「数学」のレベル差が大きい点が考えられる。また、熊本では私立高校入学者にも公立中学出

身者が多い点も挙げられよう。公立中学のカリキュラム（週３単位）で理解できる内容と、実際に高校受験で扱われる内容とのレベル差は大きい。この条件は英語も同様だが、中学入学後多くの生徒が一斉にスタートを切る英語では、小学校時代の苦手を持ち越すということはない。

２番目の社会については、調査対象校中３校が推薦（又は専願）入試で社会・理科を課していない。そのため国語・数学・英語に比べ学習へのモチベーションが低いこともあるのかもしれない。また、生徒の話を聞くと、社会科を単なる「暗記教科」と捉え、「全体像の把握」や「しくみの理由」に余り目が向けられていないことに気付かされる。そこで社会科の学習を苦痛に感じている生徒も多いのだろう。思えば自分もそうだった。

教科	国語	社会	数学	理科	英語	なし
%	11.9	20.8	42.3	8.3	15.5	1.2

表示文字列

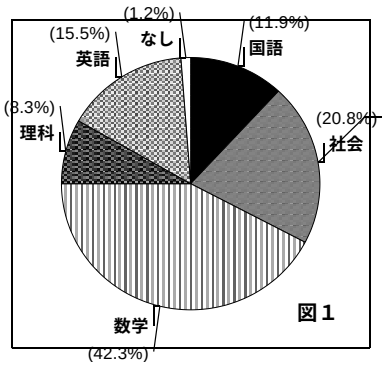
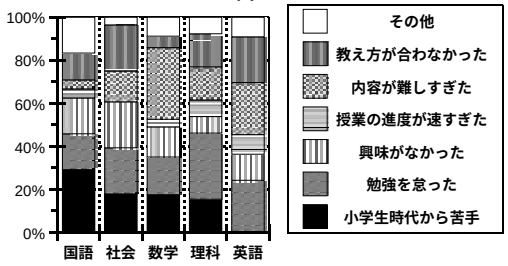


図１

２．苦手になった理由

※数値は「%」	国語	社会	数学	理科	英語
小学生時代から苦手	29.2	17.9	17.5	15.4	
勉強を怠った	16.7	21.4	17.5	30.8	24.2
興味がなかった	16.7	21.4	14.0	7.7	12.1
授業の進度が速すぎた	4.2	0.0	3.5	7.7	9.1
内容が難しすぎた	4.2	14.3	33.3	15.4	24.2
教え方が合わなかった	12.5	21.4	5.3	15.4	21.2
その他	16.7	3.6	8.8	7.7	9.1

図２



その教科が苦手になった理由を問うた（**図２**）。

全体に「進度が速すぎた」との回答は低く、多くの中学校で進度への配慮はなされていると推測される。

個々の教科に着目すると、数学の「内容が難しすぎた」、理科の「勉強を怠った」、国語の「小学校から苦手」が、いずれも約30%と目立つ。

数学で「小学校から苦手」と答えた割合がさほど高くないことを考えると、算数と数学の間には生徒にとって大きな難度差があるようだ。

一方国語で「小学校から苦手」が多いのには、社会全体の「活字離れ」や、子ども達が好んで視聴するテレビ番組の低俗化、家庭内・友人間コミュニケーションにおける語彙の乏しさも要因となっていると思われる。語学力は環境に大きく影響される。

社会と英語で「教え方が合わなかった」の回答が、他教科に比べ多い。調査対象に限ってではあるが、教科を担当する先生によって生徒の意欲や理解度に差が生じたようだ。

３．求める授業像

生徒達が受けたいと思う授業について、Ａ～Ｃ群から選び答えてもらった（**図３**）。

［Ａ群］

① 授業内容のレベルは高くなくても、分かりやすい授業。
② 授業内容が多少難しくても、知的関心に訴える授業。
③ その授業を受けることで、大学などの受験に対応できる授業。

［Ｂ群］

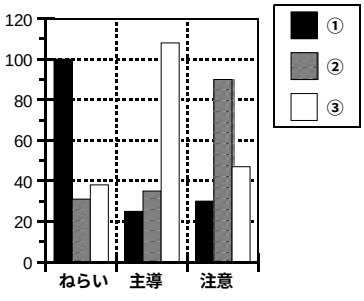
① 生徒に考えさせ活動させる等の時間が長い、生徒主導の授業。
② 先生が説明したり繰り返させるなどの時間が長い、先生主導の授業。
③ 上の①・②がほど良くミックスされた授業。

［Ｃ群］

① 授業態度や服装等に問題があれば注意されるような授業。
② 授業中の私語など他に直接迷惑がかかる行為のみ注意されるような授業。
③ 授業中にはその教科の指導以外に注意されないような授業。

※数値は人数	①	②	③
授業のねらい	100	31	38
主導権はどちらか	25	35	108
授業中の注意	30	90	47

図３



この「概要」では省略するが、母集団を苦手理解度で３層に分けて捉えてもいるので（本論文に掲載）、その結果にも触れながら述べたい。

［A群］では、「①分かりやすい授業」を求める生徒が突出している。これは理解度が高い層でも30%を超える割合に達した。中学時の既習事項を、私達は「(生徒が) 分かっているもの」として授業を進めがちだが、私達が予想しないところで小中学校の「積み残し」があるのかもしれない。

［B群］では、各層ともほぼ同じ傾向を呈し、「③折衷型」授業を求める回答が突出していた。そんな中で「①生徒主導」の回答が最も高かったのは、理解度が最も低い層だった。これをどう捉えるかは一概には言えないが、「座学型・講義型」授業へのアレルギーも含まれるのではないか。

［C群］では、「②迷惑行為のみ指導」が最も高い割合を示した。しかし、この回答では、理解度が高い層（この層の75.9%）と低い層（同40.0%）との開きが目立った。理解度が低い層の回答は３つに分散し、「③教科以外指導なし」は35.6%に及んだ。

第３章　他校訪問記

勤務校の２学期中間考査期間中（10月)、首都圏の先進校を視察訪問した。訪問先は、週刊誌などの情報を元に次の４校にした。視察の目的は各校の教科指導力向上策取材と、授業見学である。

但し、字数の制約から、見学した授業の詳細は本論文に譲りたい。

※文章が冗長になるのを避けるため、敬語表現を省略した。了承いただきたい。

１．星美学園中学高等学校

東京都北区赤羽にある、カトリック系の学園である。幼稚園・小学校・短期大学を併設しており、中学・高等学校共に学年３クラスの女子校である。

工藤校長先生、城所教頭先生は、雑誌の学力伸長度ランキングで上位に取り上げられたことにやや困惑しつつ、「先生方が真面目に授業に取り組んだ成果でしょう」と話していた。

同校では、コース・カリキュラムの改定が、生徒の意識と共に先生方の意識の両方を変えてきた。教科指導に関する部分では、教科会において教授法の検討が行われ、生徒による無記名、５段階の評価の他、学習情報業者による外部評価を含めた授業評価を取り入れている。

飯塚先生による英語（中３）を見学した。

「英語が好きになる授業」というのが、第一印象である。全体をほとんど英語で、しかもテンポよく語り進める飯塚先生の姿は生徒たちの目には憧れと映るだろう。また、構成や自作プリント、発問と、先生のオリジナリティが感じられた。ゲーム性が高く、生徒の参加機会が多い点も目を引いた。生徒がペアで読み合う場面が多く、お互いに刺激を受けることもできるだろう。

印象的だったのは、細かな励ましの言葉などケア的な働きかけが常になされたところである。

２．共立女子中学高等学校

東京都千代田区にある、中高一貫の女子校である。

岡田教頭先生の言葉を借りれば、中高一貫校が増える中、学校の実践が対外的に説得力をもつためには何らかの「風をおこす」必要があるとのことだった。同校ではテーマ研究と情報教育がそれにあたる。これらの実践を通じて成長した生徒も多い。他、時事用語を取り上げた「今週のキーワード」プリントを紹介された。このような日常の取り組みで、生徒の学習や進路への意識が高まっている。

興味深いのは、授業評価などの教科指導力の向上を図る制度は特になく、授業に関しては個々の先生に任されている点である。但し、習熟度別授業の採用に伴って、同科目担当者間の情報交換が盛んになり、自家製プリントの共有化が進んだ。また、シラバス作成により授業の均質化が図られ、先生同士のノウハウの交換も促進された。他に、中高共に年６回の授業参観が実施され、保護者の提出する感想文を授業改善の参考にしているとのことだった。

広川先生による公民（中３　テーマは「議院内閣制」）を見学した。

分かりやすく印象的な授業のために「今を知り・伝える」ということが大事であることを再認識できた授業だった。これは公民以外の教科・科目にも共通するだろう。広川先生の授業の秀逸さは、今日のトピックを具体的に取り上げる他、主題を、ある時は大枠を概念的に、ある時は正確な用語を用いて、幾重にも重ねて説明することで知識の定着を図るところにもある。

３．文化女子大学杉並中学高等学校

同校の野原校長先生は、長年、NHK で教育担当記者・解説委員を務めた、いわゆる民間人校長である。同校

は、野原校長先生の学力観、即ち「学力＝〈学ぼうとする力〉〈学ぶ力〉〈学んだ力〉」を基礎に「分かる授業の徹底」に取り組んできた。これは単に内容を平易にするだけではない。生徒が教科内容を理解するに止まらず、「考える姿勢」を全ての教科・行事で涵養するということを念頭においている。野原先生によれば、同校の実践により培われた生徒達の「自ら考える習慣」は、生活態度へも顕著に反映したという。

野原先生が常勤・非常勤を問わず先生方に呼びかけているのは「授業開始の５分間で引きつけを」ということだ。これは授業の成否に大きく関わる要素である。家庭科のある授業で「国際家族年」について取り上げた時には、「あなたのお父さんはお母さんのことをどう呼びますか？」という問いから導入したらと指摘したという。身近なところから家族のについて内容を深めていくのである。

４．郁文館中学高等学校

教育再生会議メンバー渡邉美樹氏が理事長を務める学校である。中学の大木先生にお会いした。同校の学校改革の中心は「360度評価」である。先生方の実践が、管理職のみならず、生徒、学年主任、教務担当者、保護者等あらゆる角度から評価されるのである。各評価は細部にわたっており、例えば、授業開始時にも「机の並び」等13項目においてチェックされる。これは報酬に反映する。同校で大切なことは、先生方が仕事を「余暇のためのもの」ではなく「最優先すべきもの」との捉え方をすべきことで、その意味で「サービス」の側面より「聖職性」が大いに勝るのだ。従って、その考え方について来られない先生に対しては、「選択」を迫る場面も生じるという。

同校の教師評価は単に勤務の適正化を目的に行われているのではない。子ども達の夢実現への積極的サポートなのだ。同校では定期的に生徒を対象にした「夢カウンセリング」が実施され、個々の設定した人生目標に照らし合わせた達成状況が検証されている。この実践の根底には「子ども達の幸せのためだけに学校はある」との認識があるという。

第４章　まとめにかえて

今日、学校を取り巻く環境は危機的である。

社会が変わり、学校が変わり、家庭が変わり、子どもも変わり、そして授業はやりにくくなった。

生徒に「受験」等の目標がない場合、授業をどう成り立たせるかには、全国で多くの先生方が頭を悩ませていることと思う。

もちろん、教師の困難は授業成立の可否に関わるところだけではない。生徒の問題行動、進学実績の向上、保護者とのトラブルまで多岐にわたる。しかし一方で、教師の仕事ほど「ゴマカシ」の効きやすい仕事もないのではないかと、私は常々思っている。教師の仕事の大半は、数値化が難しい。従って「自分は頑張っている」と言った後は、問題が生じても「生徒のせい」「保護者のせい」が横行しがちである。また、地道な取り組みより、目立つパフォーマンスが評価される例も多い。そのような意味で「教師の困難」とは、特に地道に責任を果たそうとする教師のものといえる。しかし、そうであれば上に述べた「学校を取り巻く危機」とは、その内部環境についても当てはまる。その上、多くの私学は少子化の大波の直撃を受けている。

一方で「勝ち組」私学があるのも事実である。

４校を訪問し共通して感じたことは、「①授業が優れて」おり、「②生徒がよく授業を聞いて」おり、「③学校内が整然として」いるということである。「②の主要因は①であり、③の主要因は②である」と言い切るのは短絡的に過ぎるかもしれないが、全く見当違いではないだろう。今日、危機的状況にある学校、特に少子化の大波の直撃を受ける私学において、困難を打開する鍵は、①を創出するための授業力向上にあるにちがいない。

今回実施した県内の私立高校生を対象としたアンケート調査でも、対象全体に授業への期待の高さ感じられた。また、「分かりやすい授業」、「生徒と教師で作り上げる授業」を求める生徒の割合が他より高く、このような授業を実践するには時間と労力を要する。

本稿では、「勤務校で効果をあげている実践」「教科指導力を高めるためのネットワーク」等も紹介する予定だった。しかし研究の進捗状況や報告書のページ数の制約から割愛した。

来年度（2007年度）、これらを含めた継続研究を行いたいと願っていたが、校内的な事情で断念した。しかし、今回の研究を通じて私自身が得たところは多かった。この報告書（本論文）が、授業によって学校を変えたいと願う全国の「仲間」に何かを伝えることが出来たのなら嬉しく思う。